

実践報告

特別支援教育を学んだ学生からのフィードバック

森 均\*

Feedback from Students who have learned Special Needs Education

Hitoshi MORI

【要 約】

本稿では、特別支援教育について講義を行った大阪女学院大学・同短期大学の学生を対象に実施したアンケートの分析結果並びに学生の感想文等について紹介し、教職をめざす方々に考えていただきたいことを提示している。

---

\*大阪女学院大学

## 1 目的

筆者は、大阪女学院大学・大阪女学院短期大学の教職課程で講義を行ってきたが、毎年、教育実習、介護等体験を終えた学生の成長ぶりを実感してきた。

2020年度からは特別支援教育が必修化<sup>(1)</sup>されたことを受け、大阪女学院大学においては科目「特別支援教育概論」を、大阪女学院短期大学においては科目「特別支援教育の基礎」を担当するようになってそのことをさらに強く感じるようになった。

そこで、前述の科目を学んでいる学生対象にアンケートを行った。本稿ではその分析結果並びに講義の中で課した感想文の一部などを紹介する。

## 2 アンケートの対象・調査時期・方法

### (1) 対象

アンケートの対象は次の学生達である。

科目「特別支援教育の基礎」履修生 短大2年生 7名

科目「特別支援教育概論」履修生 大学3年生 3名、2年生 8名

### (2) 調査時期

2022年1月

### (3) 方法

先行研究<sup>(2)</sup>を参考に作成した別紙のアンケート用紙を、最終講義の終了15分前に配布し、講義終了時に回収した。

### (4) アンケートの分析結果

アンケートの分析は項目にしたがってクロス集計したが、セルや表が多くなるので要約し次の各表に示す。なお、各表の支援学校体験とは介護等体験における2日間の支援学校での体験を指す。

表1 特別支援教育の講義に関する次の質問について

- Q1 特別支援教育の講義は、教員となる上で役に立つものであったと思うか  
 Q2 講義の内容は、理解できたと思うか  
 Q3 講義の進め方は、良かったと思うか  
 Q4 毎回返却された「講義のポイント等」に書かれたコメントは、役に立つものであったと思うか  
 Q5 講義の際に配布された新聞記事などの資料は、役に立つものであったと思うか

支援学校体験	そう思わない	そう思う	実数
あり	0.0	100.0	10
なし	0.0	100.0	8

表1は講義に関する質問の結果である。Q1～5まで介護等体験の一部である支援学校体験の有無にかかわらず、全員の学生が「そう思う」に答えている。なおQ4の「講義のポイント等」はA4用紙に、「今日の講義の狙い、講義のポイント、今日の講義で印象に残った言葉、今日の講義の感想・疑問点・質問を記述できる」といった欄を設けたもので、裏面も使用可として講義の前に配布し、次回の講義の際に、感想・疑問点・質問に答えるコメントを赤字で記入して返却していた。また、講義の内容に関係する新聞記事や資料も配布し輪読しながら、ポイントや用語の説明を行っていた。

表2は、教科書<sup>③</sup>に関する質問である。「わかりやすかったと思わない＝難しい」と思った学生がいなかったことが分かる。教科書の選択に当たってはできるだけわかりやすいものを選んだ結果であると考える。

表2 教科書に関する質問

Q6 教科書は、わかりやすかったと思うか

支援学校体験	そう思わない	どちらとも言えない	そう思う	実数
あり	0.0	10.0	80.0	10
なし	0.0	12.5	87.5	8

表3・表4は、講義中のプレゼンテーションに関する質問の結果である。

表3 講義中のプレゼンテーションに関する質問1

Q7 プレゼンテーションの作成・発表は、負担に思ったか

支援学校体験	そう思わなかった	どちらとも言えない	そう思った	実数
あり	40.0	20.0	40.0	10
なし	62.5	12.5	25.0	8

表4 講義中のプレゼンテーションに関する質問2

Q8 プレゼンテーションの作成・発表は、教員となる上で役に立つものであったと思うか

支援学校体験	そう思わない	そう思う	実数
あり	0.0	100.0	10
なし	0.0	100.0	8

表3を見ると、支援学校での体験の有無にかかわらず、プレゼンテーションの作成・発表を、負担に思った学生がいることがわかったが、表4では、全員がプレゼンテーションの作成・発表が教員となる上で役に立つものであったと思っていることがわかった。なお、プレゼンテーションの際、パワーポイントの使用は強要しなかったが、多くの学生がパワーポイントを用いたり、インターネット上から最新の情報を提示したりしながら発表していた。

表5・6は、課題に関する質問の結果である。表5の課題の負担については意見がわかれたが、表6に示すように全員が役にたったと思ったことがわかった。課題については、次の章で述べる。

表5 課題に関する質問について1

Q9 課題は、負担に思ったか

支援学校体験	そう思わなかった	どちらとも言えない	そう思った	実数
あり	40.0	20.0	40.0	10
なし	37.5	25.0	37.5	8

表6 課題に関する質問について2

Q10 課題は、教員となる上で役に立つものであったと思うか

支援学校体験	そう思わない	そう思う	実数
あり	0.0	100.0	10
なし	0.0	100.0	8

表7は支援学校での体験に関する質問の結果である。短期大学生、大学生とも支援学校での体験を評価しており、講義との関連性も高いと思っていることがわかる。

表7 支援学校の体験に関する質問

Q11 支援学校を体験して良かったと思ったか

Q12 支援学校での体験と講義との関連性は、高かったと思ったか

短大・大学別	そう思わなかった	そう思った	実数
短期大学生	0.0	100.0	7
大学生	0.0	100.0	3

(2) 自由記述欄の内容

次に自由記述欄に書かれた内容を紹介する。

① 大学2年生（支援学校での体験なし）

- ・ 支援学校という名称しか知らなかったのが、今回教員になるかもしれない立場として学べて良かったです。身近にいる発達障がいの子にも今回学んだことをもとに接することができるのと良いなと思いました。
- ・ 障がいのことや特別支援教育のことについての知識が明らかに増えたような気がする。また、自分が教師になれば障がいのある子ども達と関わる機会もないとは限らないので、彼らとうまく関わられるようになりたいと思った。

## 森 均：特別支援教育を学んだ学生からのフィードバック

- ・ 教師になるに上でとても大切な分野を詳しく学べた。
- ・ 精神的、身体的にも意識して気をつけるべき点がたくさんあると感じた。
- ・ 支援教育について詳しく知ることができたので良かった。
- ・ 授業も分かりやすく説明して下さったので理解できました。
- ・ 新しい知識もたくさん増えたとし、支援学校がどのようなところなのかを知ることができました。
- ・ この授業がないと、障がいのある子ども達に対する接し方が分からないまま、教員になることになるので、とても大切な科目だと思います。
- ・ 教員免許状を取得するうえで、この支援教育は非常に重要だと考えていたので、学べてよかったと感じています。また、将来教員にならなかったとしても、この学びは生涯ずっと役にたつ、自分のため、相手のためになる機会が必ず来ると思うので、この半年間はとてもよい学びになったと思いました。

### ② 大学3年生（支援学校での体験あり）

- ・ 体験と授業を重ね合わせて、差別にあっていない子ども達が本当にかわいそうだなと思いました。もっといきいきとのびのびと暮らせる社会であってほしいと思いました。
- ・ 支援教育は、人として知る必要がある内容だと思った。

### ③ 短大2年生（支援学校での体験あり）

- ・ 授業で貴重な体験のお話がたくさん聴けたことが、自分の学びにつながったこと。
- ・ 身内に障がいのある子がいるので、その子はこうやって学校で過ごしていたんだと学ぶことができました。教員をめざすうえで必要な科目だと思います。
- ・ 教科書にはのっていないリアルな現状を聞いしつつ、学ぶことができたと思う。何より例えが分かりやすく理解できた。
- ・ この授業で学ばなかったら知らないことが多かったと思うので学べて良かったです。自分自身や教師になった時に役にたてたいと思います。
- ・ 教員を目指すにあたってとても重要な科目だったと感じた。
- ・ 自分で作ったプレゼンの内容への印象は本当に深いです。
- ・ この授業では、自分で教科書の内容をまとめてスライドを創り、発表するという流れなので、内容がとても頭に入りやすく、勉強になります。また、支援学校で体験させていただいたことから学ぶことも多く、教師の仕事についてより深く知ることができました。

### 3 感想文の紹介

#### (1) 課題について

2021年12月に次の課題を提示し、2022年1月上旬にEメールで提出を求めた。

**【課題】** 配布した書籍「行動派スクールリーダーの経験的教職論－ホンネで綴る校長までのキャリア」の第3章を読んで、感想を述べてください。

なお、学生に配布した書籍は筆者の著作<sup>(4)</sup>であり、課題とした第3章「障害教育を学んだ教頭時代」の各節は次のとおりである。

- 第1節 子どもたちと遊んでほしい？
- 第2節 保護者の話を聞くことの大切さを学ぶ
- 第3節 小学生を退学に？！
- 第4節 新しいタイプの学校づくりの原動力

#### (2) 感想文の内容

学生が記述したさまざまな感想を大まかではあるが、節ごとにピックアップして紹介する。なお、紹介に当たっては、個人が特定されるような内容は紹介しないこと、全文は紙面の関係で紹介できないことを全学生にメール送信し承諾を得た。

- ① 第1節「子どもたちと遊んでほしい？」に関する感想
  - ・ 昼休みに小学部の児童が自転車に乗るお話の中で、「(子どもたちは自転車に乗って)まっすぐ進むだけで右や左に曲がらないことが多いから家に帰って外で遊ばせてもらえない」という言葉を読んで、幼い頃自由に自転車に乗っていたことは決して当たり前ではないということに気付かされました。
  - ・ 第3章を読んで、障がいのある子どものことを知るには、子どもと遊ぶ(接する)ことが一番だということだ。もし、森先生が彼らと遊ぶことがなければ、彼らが自転車を大好きなこととなぜ好きなのかということも知ることがなかっただろう。また、保護者から彼らの生活について知ることなかっただろう。人のことを理解するには、その人のことをよく知る必要がある。教師というものは、子どもの小さな変化に気づかないといけないので、子どもと遊ぶ(接する)ことはとても大切だと思った。
  - ・ この書籍から障がいがある生徒さんたちは素直だなと思った。私は読んでいて、実際に支援学校に体験に行った時に会った「中学部のAさん」とよく似た生徒さんがいたことを思い出した。「一緒に行こう」という言葉によって森先生とその生徒の関係が深まったのかなと感じ、なんだかほっこりした。どの箇所も私にとって刺激が強かったが、やっぱりどの場面でも現場の先生方の生徒への強い想いが感じられた。それと同時に、教員の裏側、そのまた上の教育委員会などの複雑で難しい内容も知ることができた。読み進めていくうちに、森先生がよく言っている「話し出したらいっぱいあるけど・・・。」がなんとなく納得できるなと思った。

② 第2節「保護者の話を聞くことの大切さを学ぶ」に関する感想

- ・ 第3章の中の「保護者の話を聞くことの大切さを学ぶ」を読み、このような表現方法が正しいか分からないが、保護者の味方になること、保護者を味方につけることが大切だと思った。私は高校時代の部活動で、先生が困っているのではないかとというくらいに質問攻めしている保護者の方や、テレビドラマ等に出てくるモンスターペアレントを見て、変わった保護者もいるなあと思直していた。しかし、森先生の書籍の中のPTAの方々には子どもが大切だからこそ学校の仕組みが知りたい、子どもをより良い環境で育てたいという思いがあったのだと感じた。私が（変わっているなあ）と思っていた当時のあの誰かのお母さんも、子どもが大事だからこそあんなに必死に言っていたのかなとも思えた。そして、この書籍、また講義を通して、子どもを育てる保護者の方への敬意の大切さを学んだ。また、障がいのある子どもを育てている保護者の方は私が思っている何倍もの悩みや不安の中、お子さんを育てられてきたということをおぼえてはいけないと思う。そんな中で、不思議に思ったことや不安に思ったことを質問してこられる保護者の方に、寄り添い、不安の種を一つ一つ解消していくことはとても大事なのだと学ぶことが出来た。内容を読んで、ここまで丁寧に対応される支援学校の先生方の凄さを感じつつ、自分はそんなことが出来るのだろうかと不安にも思うが、保護者や生徒に寄り添って保護者や生徒の味方になること、保護者の方々に「あなたが担当で良かった」と思って貰えるような行動を心がけることが大切だと改めて感じる事が出来た。

③ 第3節「小学生を退学に!!」に関する感想

- ・ 森先生の著書を読んで私は、何かはっとさせられた気がした。自分の知っている世界は狭すぎる、知らないことが多すぎると、良い意味でも悪い意味でも複雑な気持ちになった。まず、義務教育の中で退学というものが存在するという事だ。なんとしてもこれは避けたい選択だと読み進めながら強く思った。
- ・ さまざまな生徒について書かれていましたが、その中でも私は特に、失踪して居なくなってしまった児童の話が非常に印象的でした。もし私がその児童の担任だったとしたら本当に悲しい出来事だと思いましたが、その問題が起こってしまう前に担任がすべきだった行動とはどのようなことだろうと考えました。家庭訪問に行っても気づかなかったという点では、普段から生徒一人一人をより慎重に考え、その生徒を気にかけるべきだったと思いましたが、そう考えると教師の役割はとても多く、責任のある仕事だということを感じました。

支援学校で体験させていただいた時にも感じましたが、森先生の書籍にもたくさんの例があったように教師は生徒一人ひとりの行動から目が離せないため十分注意が必要であるということを感じました。今まで森先生が経験してきた出来事はここに書かれていることだけではないと思いますが、これら一つひとつの事件から多くのことを感じ、学ぶことが出来ました。教師になるということは決して楽な道ではないと思いましたが、私は英語の授業でコミュニケーションをとるだけの関係ではな

く、生徒一人ひとりと向き合い寄り添える教師になりたいと強く感じました。

- ・ 一番印象に残っているエピソードは小学5年の女子が一家全員で失踪した話でした。教育現場で「失踪」が起こるのは予想外だと思っていたし、もし自分が担任を持っていたら気が気でおれずに毎日平常心を保つことが辛いと思いました。いつ何が起こるか分からないことを常に頭に置いて教師という仕事をこなすことが本当に大事だとこの本を読んで気付かされました。
- ・ 小学生の退学が私にとってはとても衝撃的でした。小学校は義務教育なので、退学は存在しないと思っていました。しかし、突然の失踪により、退学ということを担任が知ることはとても悲しいことだと思います。そこで在籍させておいて、卒業証書を学校で保管する。という対処方法は先生だけでなく、周りの人に対してもしっかりとケアをしようとしているのだと感じました。結果として、その子はどうなったのかは誰にもわかりませんが、記憶や気持ちの中には存在していると思えば良いのではないかと考えました。
- ・ 第3章のなかでも、p.78からのB子さんの話が特に印象に残りました。教師に関わらず、誰もが大切な人を失う経験をするだろうし、今日会った人に次の日も必ず会えるとは限りません。そのことは分かっている、後悔する行動を取ってしまうことが多いです。教師としてなら自分と同じ教職員、生徒又は生徒のご家族の死を見送ることになると思います。誰一人として欠けてほしくなくても、現実はその上手くはいかないだろうと感じました。私がお世話になった先生方のなかにも、過去に生徒を亡くした人がいました。その生徒さんが亡くなったのは随分と前のことですが、その先生は長期休暇前には必ず「生きて帰ってこい」と言っていました。その先生や、B子さんの担任の先生の話を読んでいると、教師にとって生徒はかけがえのない存在なんだろうと思います。ただ、B子さんの場合は行方が分からないこともあり、精神状態もより辛そうだと思ったのと同時に、それでも教壇に立ち、障がいのある子ども達の前では明るく振る舞う先生の凄さを感じました。私はまだ子ども達のことよりも、自分自身のことについて考えることに精一杯で、教育実習中も生徒の様子に気づけなかったことが何度もありました。実習の時のことですが、次の授業まで時間がなく、貴重品も置いていなかったため、実習生の控え室の鍵を閉めなかったことがありました。ドアが歪んでいて鍵を閉めることに毎回時間がかかっていたため、その日、指導担当の教諭の方に「毎回鍵を閉める必要はありますか。」と尋ねたら、「鍵が空いていれば、生徒が入るかも知れない。そこで怪我をするかも知れないし、もし生徒が何かを盗むようなことがあれば、盗む方が悪いけど、それでも生徒に罪を被せるようなことはしたくない。」と言われ、自分のことしか考えていなかったことを反省しました。きっと、駆け出しのころは余裕がなく、同じようなことをしてしまうかもしれませんが、早く教師の仕事に慣れ、生徒のことを第一に考えられる教員になりたいとB子さんの話を読んで思いました。



④ 第4節「新しいタイプの学校づくりの原動力」に関する感想

- ・ 一番衝撃だったものは、福祉葬についてである。なんとも言葉には表しにくい、母親を亡くす辛さと孤独はとてつもなく悲しいことであるのにさらに、生活保護を受けている状況であることから、最低限の費用で行われる葬式だと考えると本当に言葉が詰まるような思いになった。もし私が教員になったとしてそのような同じ状況に出くわしたらと想像するだけでも心が痛くなった。私はこのF君が今どうしているのかとても気になった。F君が職を手にするのができたのか、F君にとって誰か心の許せる人がいるのか、心が休まるようなそんな時間があるのかなどだ。とにかく幸せに暮らしてほしいと思うばかりだ。
- ・ 特に印象に残っているのが「教員が諦めたら生徒たちの成長は止まる。」という部主事の言葉である。なぜなら障がいのある生徒たちは他の健康な生徒たちと比べて、教師たち、両親のサポートが必要であるため、そのサポートがなくなると孤独もしくは生きることが困難である。また支援学校では、障がいの重い生徒は先生方のサポートが手厚いが、その反面障がいの軽い生徒へのサポートは障がいの重い生徒に比べて行き届いていない。私が支援学校に実習に行った時、担当の先生も同じことをおっしゃっていた。

生徒を本当に思うということは、生徒たちが目先のことだけをできるように指導するのではなく、卒業後の将来のために役に立つことを指導し、アドバイスや教育に取り入れ、生徒が自立できるように育てることだと気づいた。

⑤ 全体をとおした感想

- ・ 教職課程を履修する学部2年生の理解度は、一般的に「教職の概要を少しは掴めるようになってきた」「学習指導要領の重要事項についてある程度は説明できる」そんな段階だと思います。ですので、この本に書かれている現場での生きた経験談、とりわけ支援学校での出来事は私にとってインパクトが大きかったです。この第3章は全部で4節ありますが、特に第3節「小学生を退学に?!」第4節「新しいタイプの学校づくりの原動力」は身につまされる思いでした。

障がいのある小学生の子どもを連れて失踪した家庭のことで、母親に先立たれ取り残された障がいのある男子生徒のことを、とても他人事とは思えません。私自身、身寄りの居ない母子家庭、不登校、ヤングケアラー、かつては自分自身を傷つけたり自死しようとしたり…といったような経験から、教育の現場にマイノリティの子どもたちへの支援を切実に求めていますし、ただ思うだけでは物足りず、さらに深く学ぶつもりですが、上記二つの事例を見て、より真剣に研究に取り組もうという気持ちが湧いてきました。自分の卒論のテーマで扱う「マイノリティの子どもたち」を、ひとり親家庭の子どもとするのか、医療的ケア児とするのか、はたまたニューカマーにするのかはまだ決まっていませんが、彼らが直面する問題を決して観念的ではなく、フィールドワークなどを通して実際現場で起きている課題点の発見から解決を図ることができればと思っています。

- 私は、この本を読んで、通常の学校との違いがたくさんあることに気づきました。通常なら、教頭先生という立場であれば教員たちの上に立ち、指導するという役割があると思います。しかし、支援学校ではベテラン部主事からいろいろなことを教わるということに驚きました。また、生徒たちについても、私たちに馴染みのある一輪車でなく、自転車に乗るところが違うと思いました。勉強も運動も、基礎的なことから始めていることがわかります。他にも、決まった徘徊のようなことをする生徒や、バス待ちの時間のソフトボールなど様々なイレギュラーがあることも知りました。生徒以外にも、保護者控室という部屋があり、保護者と教員が質問の受け答えなどを通して密に関わり合っていることがわかりました。B子ちゃんやE君・F君の事例については、こんな事件のようなことが起こるのかと驚きました。障がいがある子どもとその家族は、私たちが想像できない苦悩を抱えているのかなと考えました。支援学校は、通常の学校とは違う部分があり、とても興味深く感じました。
- 管理職だからといって、全ての事柄を完璧にこなすことはできないし、トップダウンはあまり良くないやり方ということがわかりました。むしろ、失敗を何度も繰り返して多種多様な経験を積み、その上でより良い学校の在り方を考えていくことが大切であると思いました。文中にも書かれてあるように、「スクールリーダーをめざすものは、失敗から学んでいく心意気が必要である。」という言葉は深く心に響きました。管理職という高い立場になれば、それに伴う責任も大きくなるわけで、自分だけの問題でなく、他の教職員のことや生徒・児童のこと、あるいは地域のことなど、のしかかるものは重くとても複雑だと思えます。学校の顔となる存在である以上、周りからの評価や評判は意識せざるを得ない立場なのかと思えます。私ならば失敗を恐れ、これまでのやり方に順従に従うと思えます。より良い学校を目指すには誰かが動かなければ変わらないし、それをスクールリーダーが率先して行うことで、他の先生方も動きやすくなるというか、失敗を恐れず、生徒のために色んなことに取り組みたいと言う気持ちも高まると思えました。社会の流れに沿って、学校にも変化が求められると思えます。その際に、長く教育現場を見てきたというキャリア的経歴だけでは分からない、例えば、授業のオンライン化やデジタル化、SNS問題、いじめ、体罰などその他にもたくさん社会の風潮が変化しています。実際に学校という現場に直接関わる人しか見えない問題点や改善点も多くあると思うし、若い先生方の意見も取り入れるためにも、スクールリーダーの全体を動かす力というものは鍵になると思えました。そのためには文中に書かれていたような話し方や率先して動いている姿を周囲の人たちに見せることはとても重要なことだと思います。
- 第3章を通して、改めて「教師になる」ということは覚悟がいるものなんだと思い知らされました。3章のどの話も興味のある話ばかりでしたが、一番印象に残ったのはE君とF君の話です。やはり中学生ともなると「性」に対して興味が湧くこともあると思います。ですが、それを間違った方向へ進んでしまうと取り返しのつかないことになる危険性もあるということです。この話を通して何より銭湯である男がF君に対してした行動がE君という、いわば新たな「被害者」を生み出してしまおう。障がいを

だから大丈夫、バレない、といった安直な考えが、森先生たち教師にどれだけの対応を強いさせたか、そして障がいのある子どもがそういった被害者になることにも憤りを感じました。

p.s.先生の本はすごく内容が濃くて面白いです。リアルな教育現場が読んでいて伝わってきます。課題は3章のみですが、もっと知りたいと思ったので1、2章も読んで、あと残り4章のみです。高等学校の定時制課程で非常勤講師として教えていたクラスで、荒れていた生徒たちが徐々に変化していく様子、卒業式の日はまだ30代前半の森先生に何度も頭を下げていた定年退職する担任の先生のことを読んでいてすごく感動しました。色々な教師の形があるんだなと改めて思いました。

- ・ 支援学校の教員になるのが初めての立場の教頭となると、先生方の不満も本当にすごかったんでしょう。もし私も担任の立場であれば、私の方が障がいのある子について詳しいのに、なんで何も知らない教育委員会から来た人が私たちの上に立つのだろうと思うでしょう。しかし何もわからないから色々教えてくださいったのもかもしれませんが、私は先生の性格がほかの先生たちに受け入れられたのかと思います。私自身もすごく人見知りで、最初はいつも年齢に関係なく全員に警戒心を出してしまって怖いと思われがちですが、先生とは打ち解けるのが早くてこれは先生の性格のおかげだなと思っていたので当時ほかの先生も「この先生ならしょうがないな、教えてあげようか」と思ったのではないかと思います。障がいのある児童、生徒の学校生活での出来事を読むと、通常学級では考えられないことが起こってそのようなことがないことは当たり前ではないことが分かりました。もし教員になることがあれば一般の学校にも現在は少人数ですが障がいのある生徒が学んでいるので、常に常識にとらわれず教育していきたいと感じました。実際私の親戚にも発達障がいの子がいるので、その子のお世話や勉強を教えることがあります。今回の学びを生かして対応していきたいと思いません。
- ・ この本を読んで、私は特別支援学校の教員の仕事は私が想像していたよりもたくさん仕事があり、大変であると思った。それは、生徒は一人一人性格も違い、障がいの状況も異なる。そのため、その子にあった適切な指導をすると共に、何か問題が起こった際には臨機応変に対応するための力がより求められるからである。特別支援学校には普通の学校よりも、教員の数が多いため、より教員同士でもコミュニケーションをとり、協力し合うことが大事だと感じた。  
そして、教員や保護者との連携も大事だと知った。生徒のことをよく理解するため、学校がより良くなっていくためにお互いに連携していく。そうすることで、生徒が学校で過ごしやすいような環境も周りにいる大人がつくっていくことが必要であると学んだ。  
この本には、実際に先生が経験してきた出来事が書いてあり、こんな出来事も起こるのだと初めて知ったことばかりだった。私はまだ支援教育について、まだまだ知らないことが多くあると感じた。これからもっと学びたいと思う。
- ・ 第3章を読んで、重要だと思ったことは「根気が必要」ということと「細心の注意を

払う」ということです。

- ・ 各学部の部主事からの様々なアドバイスを受けておりましたが、その中で印象的な言葉は「(部主事は)川向う(教員側)にいることだけは忘れないでほしい。」「子どもたちと遊んで、先生方を安心させてほしい。」でした。森先生が教育委員会事務局出身という事だけで他の先生方や保護者からの目が異なる厳しい世界だと言うことも伝わりました。
- ・ 教職課程の他の授業でもよく「スクールリーダー」という言葉を聞きました。先生の本を読んでいて正確な情報のタイムリーな発信を行ういわば学校内での大黒柱なんだなと感じました。また部主事が言われていた「教員が諦めたら生徒の成長は止まります」との一言がすごく心に残りました。正直、教師になりたい気持ちはありますが不安の方が大きかったのでこの本を読んで少し不安から解放された気になりました。夢に向かって頑張りたいという気持ちがより一層強まりました。
- ・ 私は「行動派スクールリーダーの経験的教職論」を読んで教師という仕事の厳しさと、それと同時に尊さを学びました。特に私が印象に残っていることは、支援学校に通う子どもたちの保護者との内容です。「保護者との信頼関係」これは支援学校だけでなく、どの学校でも必要不可欠なことです。私自身、両親が教育に携わる仕事をしているためあまり感じたことはありませんが、保護者からすると、教師は雲の上の存在です。だからこそ、その信頼を裏切ることはいけませんし、それほど重要で尊い職であると改めて感じました。もちろん教師からすると、とてつもないプレッシャーがあると思います。その面から見ても教師という仕事は身体的にも精神的にも負担の多い仕事だと思います。しかし、だからこそ自分が担当した生徒たちの成長を見ることは感動的で貴重で尊い仕事だと感じました。とても大変で厳しく、周りからの目を常に意識しなければならない仕事ですが、それと同時に保護者からの信頼や子どもたちの成長は頑張れる“道しるべ”であり、自信につながるのだと学びました。私は今までの教職の授業で美化されていない教師の実態をたくさん学びました。その上でこの職の魅力を自身の目で感じたいし知りたいです。
- ・ 障害教育の知識がない状態から、養護学校の教頭先生を務められたということで、やりやすいものではなかったかと思われそうですが、ある意味色々教えてもらえる先生(部主事)がおられて良かったと思いました。また、私も支援学校での実習の時にあったなあという経験もありました。1つめは、「家に帰ると遊ばせてもらえない」というところでした。たしかに、親も施設の人も、自由にしすぎたら怪我や事故を招くし、心配にもなりますよね。その分、先生の対応がすごく大らかで自由だったので、放課後遊べない分楽しめていたんじゃないかなと思いました。そして、2つめ、保護者控室の話は納得でした。支援学校ではしっかりと理解や説明が必要だと思うのでそのような部屋は必要だと思いました。

児童の退学の話はドラマかと思いました。消息が不明になると住民票から消されるとは知りませんでした。卒業式で名前を呼ぶという温かいエピソードにジーンとききました。その後のF君の話も、そんなに重なるものなんだなと思いました。そして福

社葬。亡くなったことへの悲しさに加えて、違うショックがあると文面だけでも伝わりました。一般の学校よりも、さまざまな生徒とその家族がたくさんいることを知りました。

#### 4 まとめ

本稿をまとめていて一つのことに気付いた。それは、教員生活 30 年間をとおして障害のある生徒や障害の傾向のある生徒への対応が一つの軸であったということである。時系列を無視して 30 年の間に経験してきた立場を列挙すると、工業高校全日制課程の期限付き講師(6ヶ月毎の雇用)、工業高校全日制課程の教諭、工業高校定時制課程の非常勤講師、養護学校(知的障害)小学部・中学部担当教頭、高等豊学校(高校年齢の本科・短期大学年齢の専攻科設置)の校長、高等支援学校(知的障害)校長、工業高校(全日制課程・定時制課程併置校)校長、普通科高校(知的障害生徒のための自立支援コース設置校)校長、教育委員会事務局高校教育課充て指導主事、障害教育課首席指導主事である。

工業高校では、英語だけ全くできない生徒、漢字が読めない生徒、難聴の生徒、弱視の生徒、内臓疾患で余命4年と宣言されている生徒、学校管理下の事故で障害が残った生徒等、様々な生徒達の就職に全力を尽くしていた。それは自分の努力ではどうしようもない状況にある生徒の進路実現に向けて一緒に取り組むという意識であった。したがって、母親に捨てられ施設で育った生徒、中国残留孤児の子孫で日本語が不自由な生徒、いじめにあったことのある生徒達にも等しく対応していた。

また、養護学校、高等支援学校、障害教育課では、障がいのある生徒だけでなく、保護者のおかれている状況、心境、将来への不安、教育と福祉との関係、教育と医療との関係等、一人の力ではどうにもならない現実も知ったのである。

最後に、「教育の原点は障がい児教育にある」と言われる方に何人か出会った。高校の世界と支援学校の世界を経験した私からすると、その本質は生徒・保護者の心に寄り添うとともに、日常的な情報交換と誠実なコミュニケーションの積み重ねにあると考える。本稿が教職をめざす方々にそのことを考えていただくきっかけとなれば幸いである。

#### 【注】

- (1) 加藤 宏 2016, 「教職課程での特別支援教科の必修化の意味するもの」, 筑波技術大学テクノレポート Vol.23 (2), pp27-31.
- (2) 五浦 哲也 2018, 「大学の教職課程における特別支援教育の講義の重要性に関する試行的研究—通常の学級の教員を目指す学生の講義前後の変容—」, 北海道情報大学紀要, 第30巻第1号, pp55-74.
- (3) 田中良三・湯浅恭正・藤本文朗 2020, 「パワーポイントで学ぶ 教師になるための特別支援教育」, 培風館
- (4) 拙著 2017, 「行動派スクールリーダーの経験的教職論—ホンネで綴る校長までのキャリア」, 学事出版

## 講義アンケート(特別支援教育)

Q1. 自己評価欄の1～5のいずれかに○印を付けてください。

番号	質問	自己評価				
1	特別支援教育の講義は、教員となる上で役に立つものであったと思 うか	1. 全く思わない	2. ややそう思わない	3. どちらとも言えない	4. ややそう思う	5. 非常にそう思う
2	講義の内容は、理解できたと思うか	1. 全く思わない	2. ややそう思わない	3. どちらとも言えない	4. ややそう思う	5. 非常にそう思う
3	教科書は、わかりやすかったと思うか	1. 全く思わない	2. ややそう思わない	3. どちらとも言えない	4. ややそう思う	5. 非常にそう思う
4	講義の進め方は、良かったと思うか	1. 全く思わない	2. ややそう思わない	3. どちらとも言えない	4. ややそう思う	5. 非常にそう思う
5	毎回返却された「講義のポイント等」に書かれたコメントは、役に立 つものであったと思うか	1. 全く思わない	2. ややそう思わない	3. どちらとも言えない	4. ややそう思う	5. 非常にそう思う
6	講義の際に配布された新聞記事などの資料は、役に立つもので あったと思うか	1. 全く思わない	2. ややそう思わない	3. どちらとも言えない	4. ややそう思う	5. 非常にそう思う
7	プレゼンテーションの作成・発表は、教員となる上で役に立つもので あったと思うか	1. 全く思わない	2. ややそう思わない	3. どちらとも言えない	4. ややそう思う	5. 非常にそう思う
8	課題は、教員となる上で役に立つものであったと思うか	1. 全く思わない	2. ややそう思わない	3. どちらとも言えない	4. ややそう思う	5. 非常にそう思う
9	課題は、負担に思ったか	1. 全く思わなかった	2. ややそう思わなかった	3. どちらとも言えない	4. ややそう思った	5. 非常にそう思った
10	プレゼンテーションの作成・発表は、負担に思ったか	1. 全く思わなかった	2. ややそう思わなかった	3. どちらとも言えない	4. ややそう思った	5. 非常にそう思った

Q2. 介護等体験で、支援学校に行かれた方のみお答えください。

11	体験して良かったと思ったか	1. 全く思わなかった	2. ややそう思わなかった	3. どちらとも言えない	4. ややそう思った	5. 非常にそう思った
12	体験と講義との関連性は、高かったと思ったか	1. 全く思わなかった	2. ややそう思わなかった	3. どちらとも言えない	4. ややそう思った	5. 非常にそう思った

Q3. 感じたことなど自由に書いてください。

--